

(注八) 「重盛像造型の倫理」(『国語と国文学』昭和三十一年十一月)。

(注九) 拙稿『平家物語』の作者像について——現存本の内容を材料にして——(『語文研究』平成四年六月)で文覚の位置・

役割りについて考察しているが、本稿はそれを補訂している。
(注一〇) 筆者は注一の拙稿で覚明その人を作者としたのだが、覚明文書の立場で纏められれば(文書そのものが利用されていることでもあり)、他人でもよいかと考えるに至っている。

(注一一) 麻原美子氏の「平家物語と真言圈」(あなたが読む平家物語1『平家物語の成立』平成五年十一月)などに見られる。

(一九九七年九月十七日受理)

擬亡ムト仏法ヲ處ナリ也」と覚明筆の行家伊勢大神宮願書に記されているように、覚明と対立する立場で文書の作成に当たっていた。彼の左少弁還任は天台座主明雲のそれと同時期である。従って、行隆は明雲を相手として山門との折衝に当たることになったのであり、共に親平家の立場での再出発といった境遇の類似点もあって、強い親近感を抱いていたと考えることが出来る。

行隆は、このように明雲の山門に深く関わったのであるが、その後、南都の東大寺の復興に直接当たることにもなったのである。山門と南都とは覚明にあつては対立するものであったが、行隆は覚明とは反対の側から、役職の上で連続して関係をもったのである。先に、行隆を親平家の立場からの再出発となつたと記したが、彼は頼朝の世になつても東大寺の復興という仕事で（間接的ながら）繋がりを有つて生き得たのである。平家の時代から源氏の時代へとという大きな変動の時代、その直中で仕事をしながら、この時代を渡り得た行隆は、覚明とは全く逆の位置にいる文筆家（文官）であつた。

行隆の子行長は『徒然草』の「信濃前司行長」に擬せられ、甥時長は「尊卑分脉」に「書平家物語其一人也」とか「平家物語作者随一」とか記されている。「平家物語」には「左少弁行隆事」という章段（句）があり、行隆に極めて近い人物が「平家物語」に関わつたことは確かであろう。

この行隆に極めて近い人物が齎す影響は、明雲座主や清盛に対する理解といったものであらうと考える。

しかし、行隆が還任して間もなく勃発した以仁王事件に彼の立場からの理解が影を落としているとは考えにくい。恩を受けた清盛に対しても、「今ノ仰偏ニ春日大明神ノ御計ト仰キ奉リ候」（延慶本・長門本にある）という程、氏神春日大明神への信仰が篤いので、興福寺・東大寺を焼かせた清盛をそう全面的に肯定することはなかったかと考え

られる。

とは言うものの行隆の甥時長は、『尊卑分脉』に「平家物語作者随一」とされ、子息行長も藤原兼実の家司で詩文の才もあつたこと等から「信濃前司行長」に擬せられる等、覚明、文覚よりも「平家物語」作者の伝承がその周辺にある。行隆の周辺もその点では「平家物語」の作者から抜かせまい。猶、行隆の周辺は「尊卑分脉」の「随一」という表現、『醍醐雜抄』の時長、光行合作説等、合戦に詳しい者との合作説が濃いという特徴がある。ということは、行隆の周辺が齎したもの、朝廷方に関する情報や年代記的に纏め上げたりする方法などでもあつたらうか。

筆者は、覚明文書が描き出すような捉え方で纏められていた「治承物語」が、関東の頼朝旗揚げ説話・小松家勲・高野・熊野宣揚を引き纏つた頼朝による平家物語に突き合わされ、行隆周辺の文官貴族によつて体裁を整えられて「平家物語」が出来上がったかと考えるに至つている。その最終の「平家物語」となる場としては、醍醐寺は確かに近そうだと思うものの、未だ確信を持つには至っていない。

（注一）『鹿児島県立短期大学紀要 人文・社会科学篇』（昭和五九年十二月）。

（注二）「転形期の間人画像」 大夫房覚明——その生涯と文学——「（古典遺産）」

（注三）「人文」（平成九年八月）。

（注四）注記のない引用は延慶本『平家物語』からのものである。

（注五）『語文研究』（平成四年六月）。

（注六）『平家物語略解』（昭和四年九月）の「神興振」の章段。

（注七）『平家物語全注釈 上巻』（昭和四一年五月）の「神興振」の

解説。

などもありそうである。

この章の冒頭に「山門のことをことにゆ、しく書けり」という『徒然草』の一文を引いた。「ことにゆ、しく」は肯定的意味で受け取るべきものだろうと思うのだが、「平家物語」の描く山門の言動には右に挙げて来たように否定的立場で描き出していると考えざるを得ないのが少なくないのである。その否定的描出の中心が以仁王事件にあることは異論はあるまい。そのことは何を語るのだろうかというのが、本稿の筆者の関心であった。

筆者の結論は、「平家物語」の以仁王事件を頂点として前半部に相当する山門批判の記事は「治承物語」のものと考えられるということである。「治承物語」においては、山門と寺門・南都が対照されているのではないかと考えられるが、その跡が「平家物語」に色濃く残っているのではなからうか。

「治承物語」から「平家物語」へ

本稿において筆者は、先ず「治承物語」においては重盛も否定的に捉えられていて、それが「平家物語」にも痕跡を残し、「平家物語」の矛盾の原因となつていてと考えられることを記した。勿論、「治承物語」の各場面、逸話は「平家物語」に生かされる時にその文脈に従つて変容したと予想される。重盛像はその変容の中でも最も大きなものであった。その理由は、「治承物語」が融け合わされたものが小松家鼯肩ともいふべきものであったからである。

この小松家鼯肩を演じているのが「平家物語」の文覚である。「日本國ノ大將軍」の器量で平家から源氏への推移を捉えるという視点は「治承物語」にはなからう。清盛から頼朝に武家政治が實際移つて行ったのだが、その間に「小國ニ相應セヌ」器量の人がいたと見るのは独

得という外ない。文覚が挙げる重盛の嫡男維盛も、重盛同様に源氏の辱めを避けて極楽往生の道を遂げている。嫡孫六代は、文覚の弟子となるが、彼が斬られることで「平家物語」の幕が下りることになっている。『愚管抄』でも「小松内府ハイミジク心ウルハシクテ 父入道ガ謀叛心アルトミテトク死ナバヤド云」と記していて、重盛の「心ウルハシ」いことは評判になつていたようだが、重盛・維盛・六代に、成らなかつた「日本國ノ大將軍」を見るといふのはそれとも大部異なる。さて、この文覚が体する小松家鼯肩は、後白河上皇の院宣による頼朝の旗揚げと連なつていたかと考える。^(注九)文覚が繋ぐこの説話群は、勿論、頼朝の天下統一を語るものであつたが、高野・熊野信仰色も濃厚ではなかつたかと考える。

「治承物語」が突き合わされた物語は右のような頼朝の天下統一の物語であつた。「治承物語」にあつた重盛譚は、新しい「平家物語」の文脈の中で相応に変容したと思うのである(勿論、神輿振りのように「治承物語」の面影の相当に残るものもあつたが)。その小松家鼯肩の強さは『愚管抄』が唯一の例外として挙げる乗合復讐者を見事に逆転させた程だつたのだから。

重盛に関しては人物像の百八十度の改作が行われたのであるが、山門については「治承物語」の記事は余り改められなかつたと考える。それは覚明が「山門ノ骨法粗承候ニ 衆徒三千人必スシモ一味同心ナル事候ワス 思々心々也」(諸本で異同はあるが、これに関係する文がある)と木曾義仲へ答えているのに尽きよう。さて、「平家物語」の山門・南都・寺門ということになると、治承三(一一七九)年十一月十七日に左少弁に還任し、同五年六月二十六日に東大寺造営の長官を拜命した中山行隆の周辺が浮かんで来る。行隆は、覚明が歴史に登場する一年前に還任し、「以テ左少弁行隆ヲ恣ニ構テ漏宣ヲ或ハ放テ天台山ニ制シ与力ヲ或ハ仰テ護国ノ司サニ集テ軍兵ヲ已ニ絶チ王法

記されているが、延慶本——実語教、長門本——座主教・実語教と、この二本は更に山門批判を重ねる。この実語教については、早く赤松俊秀の、

古活字本沙石集卷九、(一)靈之託仏法物語事(日本古典文学大系五〇六ページ八二)が東大寺信救得業の作として収める「庵山法師衣ありや、米もありや、はろきてあらばさなかそはか」となっている。沙石集は、無住道暁が弘安六年(一二八二)に成稿、徳治三年(一三〇八)ごろまで補稿した。道暁は、何からこの記事を取材したかは明記していないが、もし平家物語とすると、それに当たるのは、今のところ延慶本だけである。

という指摘があった。延慶本の実語教の陀羅尼が信救得業、即ち覚明のものであるとすれば、延慶本のこの一連の山門批判の記事は「治承物語」のものである可能性が高い。先述のように「治承物語」は平氏批判と並べて、山門へも厳しい記事を書いていたと考えたい。

さて、「治承物語」時代の山門批判記事と見做されるものは、右の外にもある。先述の延慶本・長門本の実語教に、

敢^{かた}テ^な讀^{よみ}ニ書^かヲ無^なシ輩^らヲ 学^{まな}文^ぶノ方^{かた}ニハ削^めツ跡^{あと}ヲ 除^{はら}テ眠^ねヲ好^{この}ミ夜^よ
討^うヲ 不^ふシテ忍^{しの}飢^うヲ損^こフ財^{ぜい}ヲ 雖^も遇^あフト師^しニ不^ふ恐^{おそ}レ 雖^も向^{むか}ト弟^{てい}
子^こニ恥^はチンヤ 四^よ等^{とう}ノ船^{ふね}ニ不^ふレトモ乗^のラ海^{うみ}賊^{ぞく}ノ道^{みち}ニ得^え理^りヲ 雖^も有^あリト八^は正^{せい}ノ道^{みち}チ十^{じゅう}惡^{あく}ルカ故^ゆニ不^ふ学^{がく}セ 雖^も有^あリト無^な為^なノ都^{みやこ}ニ為^なス放^{はな}逸^{いつ}ノ不^ふ仕^しヘ 唯^{ただ}畜^{ちく}生^{せい}ニ全^{ぜん}同^{どう}ナリ 即^{すなは}チ不^ふ異^いナラ木^き石^{せき}ニ 父^{ちち}母^{はは}ニハ常^{とこ}ニ向^{むか}背^{そむ}シ主^{しゅ}君^{くん}ニハ更^{さら}ニ無^なシ忠^{ちゅう}

という部分がある。山門の僧が学問をせず、秩序は乱れ、無頼の徒化していると批判したものである。このような山門の財資をめぐる対立、闘争、学問の退転は「山門ノ学生ト堂衆ト合戦事^{付山門滅亡事}」(当道系諸

本のうち小城本には無い)にも描かれている。

非当道系諸本によると、この学生と堂衆との合戦は義竟四郎叡俊と釈迦堂衆乗房義慶とが越中国の所領のことで対決したことに始まっている。堂衆は「学生ノ所従」であつたのだが、今はそれが「学生ヲモ物トモセス」という態度となり、「國中ノ悪黨ヲ語ト」、比叡山を闘争の巷としたのであつた。その結果、「山上ニハ谷々ノ講演モ悉ク断絶シ堂々ノ行法モ皆退轉シヌ 修学ノ窓ヲ閉テ坐禪ノ床モ空クセリ」(四部合戦状本にはこの文が無い)という荒廃に至つたという。

「山門滅亡事」は、天竺・震旦・本朝に及ぶ仏法衰滅の時と、末世を代表する事件として捉えようとするのであるが、南都の東大寺・興福寺のみは例外とされている(但し、当道系諸本のうち覚一本・両足院本・大前神社本・太山寺本は特に例外としない)。東大寺・興福寺を例外としたのは、後出の南都焼き討ちとの関連があるとは言え、「治承物語」時代の山門批判記事の可能性が大きいと考える。

「山門ノ学生ト堂衆ト合戦事^{付山門滅亡事}」で荒廃した山門と東大寺・興福寺が対照される面のあることを指摘したが、この北嶺と南都の大事間の対立を描いているのが「延暦寺と興福寺額立論事」である。事件の発生を辿ってみると、二条天皇の葬送の夜、額を打つ順番について争乱が発生した——東大寺の次に興福寺が額を打つという順であつたのに、延暦寺が興福寺より先に額を打つたので、興福寺方の大衆が飛び出してその延暦寺の額を切り倒した、という次第になっている。この経緯から見ると、「延暦寺衆徒先例ヲ背テ」ということが直接の理由である。延暦寺も亦、平氏と同様に「驕ル心モ猛キ事モ」「心モ詞モ及ハレネ」という情況にあつたのであろう。この記事の背後には山門批判が潜んでいると見て宜いのではないだろうか。

山門の「驕ル心」や「猛キ事」に関係するものを更に付け加えると、後白河上皇の三井寺での灌頂に強く反対したこと(「法皇御灌頂事」)

だが、筆者は、重盛も清盛の片割れ（否定的）として捉える「治承物語」の逸話に、「謀モ賢ク心モ強ニテ父ノ跡ヲモ可繼人ニテオワセシカ小国ニ相応セヌ人」という文覚的（肯定的）捉え方の逸話が混ざり、重なっているところに最大の理由があると考えている。筆者の仮説では、文覚的捉え方が「治承物語」に被さるような形で、基本的に「平家物語」に変貌して行っただけとするのだが、「治承物語」の残り方も様々だったとする外ない。

問題の「平家物語」で、神興振りへの対応の失敗について重盛が黙り込んでいるという疑問についてだが、「平家物語」への改作者は、事件後の事情が複雑でもあり、黙り込ませて、重盛の姿を薄くさせるのが最上と判断したのであろう。

山門と南都・寺門

『徒然草』によると、「平家物語」は天台座主慈円に扶持された信濃前司行長によって纏められたということであるが、「平家物語」の前半部における山門の印象は余り芳しくない。

前章「平重盛と源三位頼政」で扱った安元三年四月の神興振り事件における山門の描かれ方は如何であろうか。頼政の阻止にかかる決死の覚悟（源平闘諍録・南都本と当道系諸本では板挟みの窮状を訴える言葉に止まっている）と見栄よく重盛の守る門から入ることの勤めとを齎され、頼政に同調した豪雲（源平闘諍録・四部合戦状本は或る老僧としか記さない）の言葉に乗せられて、見事に狼藉を受けることになってしまうのであるが、この一連の大衆の動きには浮薄さが漂っていないであろうか。重盛と共に、頼政の引き立て役を勤めさせらる山門に対して、「治承物語」の作者覚明は好感をもっていなかったと考えたい。

山門の浮薄さといったものは、高倉宮以仁王が入寺している寺門園城寺に合力するか否かというところに、より明白に描かれている。四部合戦状本・延慶本・長門本・源平盛衰記によれば、「山門ニハ蘭城寺ヨリ牒状送りタリケルニハ可奉同心之由領掌シタリケル」とのことであつた（他本には無い）が、送られて来た牒状の「縦如鳥之左右翅 又似車之二輪^ニ」という表現にこだわって、「以^テ恐惶之思^ヲ致^サ 恭敬之詞」なければ与力しないと言い始める（延慶本・源平盛衰記もこれに近い。他の諸本は返牒を出さなかったことを記すだけである）。そこに、清盛が明雲僧正を介して大衆に（延慶本・長門本。四部合戦状本・源平盛衰記と平松家本・竹柏園本・鎌倉本以外の当道系諸本とは、単に大衆を制止したことを記す。平松家本・竹柏園本・鎌倉本は座主に言及しない）米三千石・絹三千疋を贈って懷柔をはかると（当道系諸本のうち、八坂本には無い）、大衆は忽ち「心替り」してしまった。その贈り物も大衆全員に行き渡った訳ではない混乱振りが、四部合戦状本を除く諸本には描かれている。

延慶本が「山門ノ不覚只此時ニアリ」と明言するように、この件に関する「平家物語」編著者の筆は厳しい。八坂本を除く諸本全て山門を諷した落書が立てられたことを記す。この結末は、「山門衆徒内裏へ神興振奉事」で、頼政が「山ノ大衆ハ目タリ印治ヲシケリナト人ノ申候ハン事モ山ノ御名折ニテヤ候ハンスラム」と言ったことが現実のものとなった風である。当の頼政が「薪コルシツカネリソノミシカカイフ言ノ葉ノ末ノアハヌハ」という和歌で山門をからかった（当道系諸本には無い）ということだが、頼政としては大衆の厭味を突いたということになろうか。非当道系諸本においては、山門の「心替り」はこのように頼政を介して「山門衆徒内裏へ神興振奉事」に対応しているのである。

頼政の和歌と並んで南都の僧のからかいの和歌が非当道系諸本には

(筆者注 前引の定能談)を錯語^{（注六）}して書けるなるべし」という見解を示し、^{（注六）}富倉徳次郎はそれを更に進めて「『平家物語』作者の意識的な虚構」と見做^{（注七）}していた。

「平家物語」の安元三年の神興振り事件について、筆者は、重盛が指揮官としての自分の責任に関して何の言動をも示さないのを重盛像の矛盾ではないかと指摘した。

しかし、事件の史実を追究した今、改めて「平家物語」の描き方を見直してみたらどうだろうか。七社の神興に対して「平氏ノ大将ハ小松内大臣重盛公」「源氏ノ大将兵庫頭頼政」が阻止を命じられたとして「平家物語」は描く(当道系諸本など表現は大いに異なるが、重盛と頼政を対照する点は変わらない)が、その一方の頼政の登場は虚構と見るのが通説である。頼政と対照させられる重盛はどうなのであるうか。重盛の「郎従六人」が禁獄させられていることから重盛虚構説は全く出ていないが、『顕広王記』・『愚昧記』によれば、重盛が総大将であったとはとても言い切れない。少なくとも頼政と重盛とを対照させて描いている、その重盛も、頼政が虚構であれば虚構に外ならないと言えるのではあるまいか。

頼政の虚構は『玉葉』の定能朝臣の談話のように安元三年の神興振りに対する官兵の失態から頼政の対応の巧みさを称揚する方向で行われたとしても、その頼政が重盛にも勝るとまで描き出さねばならない必然性はどこにあるのであろうか。「平家物語」の編著者は頼政の巧みさを称揚する為に重盛を脇役に配したのである。「心ヨリ外ノ狼藉」であったとは記されている(「心ヨリ外ノ」は大衆側からだろう)のだが、それは「忠清景家牀ノ者ナラハ縦入道殿イカニ仰ラルトモカクハヨモアラシ 片田舎ノ者ハカ、ルソトヨ」と窘める重盛の眼前でそのような無骨な振る舞いがなされ、重盛はそれに為す術もなかったことになっている。

「平家物語」は説話を寄せ集める形で成っていて、その一つ一つの説話は独立性が強い。人物像の矛盾は木曾義仲像が著名だが重盛像の矛盾も、このような「平家物語」の成り立ち方に原因するとしか捉え様はないのであろうか。

重盛像の矛盾(東大寺を焼いてしまった重衡と同様に「不及力次第ニテ候」という返事で納得することになりそうだが)が、「平家物語」の形成の右のような事情の上に生じていることは争えない点だが、筆者はこの神興振りの虚構を生んだものをもっと考察してみたいと思うのである。

冒頭に記したように筆者は、覚明文書的文脈で清盛を中心とする平家一門の横暴から滅亡までを描いた「治水物語」なるものを「平家物語」の前身として考えてみようとしている。覚明文書において重盛はどう捉えられているのだろうか。覚明文書は重盛死後に書かれるので殆んど彼に言及したものはないが、唯一、興福寺の三井寺への返牒に「男子或忝^シ台階^ヲ或列^ル羽林^ニ」という文がある。「清盛ノ子息達官途成事」に相当する記事で、当時「忝^シ台階^ヲ」ているのは未だ重盛の外にはいない。「平家物語」では清盛の子息達の繁昌振りが畳みかけられて行く、その最先端で花々しさに目を奪われる気がするが、覚明文書は苦々しい例として勿論挙げているのである。覚明文書の重盛に対する見方は清盛の片割れという以上に出ないのではあるまいか。神興振り事件の虚構に戻るが、頼政を称揚し、重盛をその引き立て役に配するという企ては覚明文書の発想と言えないであろうか。極めて大胆な憶測になってしまうが、神興振り事件の虚構は「治承物語」で一応成立していたと考えたい。

「平家物語」の重盛について早く小林智昭はその論理の破綻を種々に指摘し、その背景をも考察していた。^{（注八）}小林が指摘したように「平家物語」の重盛の矛盾(論理の破綻)は少なくともないのである。その背景

で表現は相当に異なる場合もある)の存在を指摘している。従って頼政の守護する門を避けた七社の神輿が重盛の指揮する陣に向かつて進んだことは諸本一致している。その陣頭で狼藉が起るのであるが、その次第は、

神輿ヲ奉^テ進^メ左衛門ノ陣ヘソ押入ケル 閑院殿へ神輿ヲ奉振
事は始也 軍兵馬ノ轡ヲ並ヘテ大衆神輿ヲ先トシテ押入ムトスル
間 心ヨリ外ノ狼藉出来テ武士ノ放ツ矢十禪師ノ御輿ニタツ 神
人一人宮仕一人矢ニ當^テ死ヌ 其外疵ヲ被ル者多シ カ、ル間大
衆神人ノヲメキ叫フ聲梵天マテモ及フラムトヲヒタ、シクソ聞エ
ケル 貴賤上下悉ク身毛豎ツ

のように記される。延慶本・長門本・源平盛衰記は右のように入ろうとする大衆と入れまいとする武士の間に「心ヨリ外ノ狼藉」が出来たと具体的に描いている(当道系諸本のうち中院本・大前神社本・八坂本などもこれに近い)が、四部合戦状本には「心外狼藉出来」の直前の押し合いの状況が無い。又、源平闘諍録・南都本や当道系諸本のうち屋代本・平松家本・竹柏園本・鎌倉本・小城本・百二十句本・太山寺本は入ろうとしたら「狼藉(忽^ニ)出来」したという表現になっている。重盛の固めている陣に向かったのだから神輿を射た「軍兵」「武士」を「重盛の手の」として受け取って行く訳なのだが、源平闘諍録は「重盛之郎等放矢」とその所属を明確に記す(「たいけんもんかためたるふし六人」という中院本・太山寺本・八坂本の表現もこれに類しよう)。諸本中、重盛の郎等が狼藉を働いたことを最も露骨に記しているのは源平闘諍録で、最も穏やかなのが延慶本・長門本・源平盛衰記・四部合戦状本ということになるか。

「心ヨリ外ノ狼藉」だったことによるのであろうか、ここには指揮していた重盛の姿が全く描かれていない。引用部に記した通りだが、秩序を重んじる重盛像からすれば、「心ヨリ外ノ狼藉」出来後、後悔

なり、郎等を咎める言葉なりがあっても宜さそうに思うのである。従って、ここは重盛像の矛盾点と言えるのではなからうか。

この安元三年の神輿振り事件は藤原兼実の『玉葉』を始めとする日記や年代記類に記されているが、問題の警備体勢の状況や狼藉の発生の経緯を記したものは全くない。『顕広王記』には「使藤左門忠景為將軍云々」とあり、『愚昧記』四月十五日条によると「奉射神輿之者忠景郎等十人禁獄徒七年之由云々」ということで山門の大衆が「和平」したとあることからすれば、神輿を射た武士の指揮を執っていたのは検非違使藤原忠景なる人物だったらしい。しかし、重盛も自分の郎等が神輿を射たと認めていたことは、『愚昧記』の四月二十日条に「内府郎従六人禁獄云々 是依奉射神輿事也 此条大衆不及訴申依恐神慮為拜謝也 又内府進申請云々」とあることから間違いない。

神輿を射たことについては既に十五日に山門側と決着していた。従って、この二十日の処置は、山門側から見れば、特に責任を追及した訳でもないのに、重盛が日吉山王に責任を感じて、自ら部下を処分した天晴れな行為ということになるか。穿った見方をすれば、この日加賀守師隆が配流になっているので、平家だけが何の処罰も行われなかったという不満が噴出して来るのを恐れた処置かも知れない。しかし、それも用心深い、平衡感覚ということになるか(又、見方を変えれば、「使藤左門忠景」というのは重盛の仮名に過ぎなかったという取り方もあるか。その場合は、十人で合意に達していたのに蓋を開けて見たら六人に過ぎなかったという甚だ強引な処置になるが)。

一方の頼政についても、『玉葉』十九日条に定能朝臣の談として「先年依成親卿事大衆參陣之時左衛門陣方雖頼政禦之大衆不能敗軍陣又不出濫吹 事謂其人勢不可及今度之萬分之二」という話が出たというのが、一連の諸記事中の唯一の例である。このことから御橋惠言が早く「本文大衆の嗽訴に頼政の事をかくるはおぼつかなし」「此事

「治承物語」をめぐる試考（五）

——平重盛像や山門描写の変貌——

橋 口 晋 作

筆者は拙稿「治承物語」をめぐる試考（二）——延慶本「平家物語」の東大寺「伽藍ノ罰」関係記事——^{（注二）}で、「兵範記」紙背文書に見られる「治承物語」を「保元物語」・「平治物語」等と同じく年号を名称とする軍記物語と見做したのであるが、その作者としては「平家物語」諸本にも登場する木曾義仲の手書き大夫房覚明が相応しいのではないかと考えた。覚明については早く梶原正昭氏が「彼と『平家物語』とのある種の結びつきを予想してみるのは許されるのではないか」と述べて居られるが、^{（注三）}筆者は別稿「四」——「平家物語」への道など——^{（注四）}で「平家物語」諸本に収められている覚明執筆の文書（牒状・願書など）を材料として、彼がどのような事柄に言及しているか、反平家の旗を揚げた源氏をどう捉えているかといった点を調査して、覚明文書の描く「治承物語」の世界を詰めてみようとした。筆者の結論は、清盛を王法と仏法の敵と極め付け、その清盛を打倒すべく蹴起した高倉宮以仁王を反平家軍の盟王としている点に最大の特色があるということであるが、本稿では、「平家物語」の記事の矛盾、不統一の部分を取り上げて、「治承物語」の姿をもっと明らかにしてみたい。

平重盛と源三位頼政

周知のように、「平家物語」が「何事ニ付テモ吉人」^{（注四）}として描き出す忠孝の誉まれ高い重盛像は、「驕ル心モ猛キ事モ」「心モ詞モ及ハレ

「治承物語」をめぐる試考（橋口）

ネ」と極め付けられている父清盛、清盛の路線を継いで重盛・清盛の死後平氏の棟梁となった宗盛、平氏を倒して征夷大將軍となった源頼朝との間に、対立し、継承する人物の構図を作り上げていて、それが「平家物語」の物語性の一つの核となつていてと考えるのであるが、「治承物語」における重盛像はこれとどう関わっていると見るべきなのであろうか。

「平家物語」に描かれる重盛像について、筆者は拙稿「平家物語」の作者像について——現存本の内容を材料にして——^{（注五）}で、次のような疑念を漏らしたことがある。

秩序を重んじる人としての一貫性と言った時、多少気になることはある。それは、周知の「御こしふり」（覚一本）で、源三位頼政の巧みな挨拶に勢いを挫かれ、毫雲に煽動された山門の衆徒の団が重盛の固めていた左衛門陣からの突入を図った時のことである。この時、守護の武士が矢を放ち、神人・宮仕に死傷者が出、十禅師の御輿にも矢が当たってしまった（神輿を射たというのは初めてのことであった）。重盛は、東大寺等を焼いた平重衡と同様に、神輿を射た責任を問われかねない立場になってしまったのである。しかし、「平家物語」編著者は頼政の巧みな切り抜け方を賞賛するかのよう描いているが、特に重盛を批判する積もりはないようである（勿論、頼政の引き立て役になってしまった観はあるが）。

この日吉社の神輿に対する、重盛率いる平家の軍兵の狼藉事件から「治承物語」の重盛を考えてみることにしよう。

安元三（一一七七）年四月十三日の日吉七社の神輿振りに対して重盛や頼政が勅命を受けて内裏の門を固めていたと「平家物語」諸本は述べる。又、七社の神輿が最初に向かった門を固めていた頼政も、使者を遣して「小松内大臣三千余騎ニテ固メテ候」「左衛門ノ陣」（諸本